

## 地図にない道

秋田県立秋田南高等学校 二年 佐藤 萌香

私はユニフォームを着てコートに立つ、マネージャーだ。

小学四年生の時にバスケットボールを始めた私は、高校生になっても競技に携わっていたという思いから、マネージャーとして女子バスケットボール部に入部した。選手が飲むスポーツドリンクを準備したり、スクイズボトルを洗ったり、シューティングのスコアを記録したり、フットワークで合図の笛を吹いたり。選手だった頃とは大きく異なる仕事ばかりだったが、初めての経験で溢れた毎日に心を躍らせた。帰りの会で学級委員長がかける「さようなら」の号令と同時に教室を飛び出し体育館へ走っていくほど、放課後が待ち遠しかった。

しかしそんな中、先輩の引退によってチームの人数が大きく減った。これに仲間の退部やけが、新入生の入部が少なかったことなどが重なり、今、練習に参加することができる選手は三人しかいない。そのため、私ともう一人のマネージャーもたびたび練習に加わるようになった。マネージャーの仕事に加えて練習メニューに加えるということは想像以上に大変なことだったが、先輩から引き継いだチームを守りたい、頑張っている選手のためにできる限りのことをしたい、という気持ちを自分に言い聞かせるように心の中で繰り返し唱えながら踏ん張っていた。

バスケットボールは五人でコートに立つ競技だ。当然、チームとして試合に出場するためには私もユニフォームを着る必要がある。そうして私はある日遂に、久しぶりに練習試合でコートに立つことになった。自分のチームのベンチを準備し、スコアシートや氷のうを用意しながら。しかし、一年以上も空いた時間をそう簡単に埋められるわけもなく、選手として私にできることはほとんどなかった。どう動けばよいのかは分かるのに、体がついていかない。自分が仲間のプレーに合わせて動いていないのが分かる。もう選手だったあの頃とは違うのだという事実を改めて突き付けられたような気がして、心も体も疲れ果ててしまった。もう一人のマネージャーと二人で、「どうして私たちがこんなにも苦しい思いをしなければならないのだろう。」「いつまでこの状況が続くのだろう。」と、泣きながら帰った。マネージャーの仕事と選手としての活動を両立していくことなんて、初めから無理だったのだ。道

に迷っていることは分かっているけど、どこへ向かえばいいのか分からない。自分たちが今どこを歩いているのかさえ、自信を持って答えられない状況だった。次の日、体育館に向かう足が、重かった。廊下を歩きながら、このままずっと果てもなくぐるぐると歩き続けていたいと思った。

そんな日が続く中、学校からの帰り道で、小学生の頃に同じチームに所属していた友達と偶然会った。互いに近況を報告している中で、私はその苦しい現状について話した。すると彼女はいつもの爽やかな口調で、こう言った。

「マネージャーと選手の気持ちがちも分かる人なんて、なかなかいないよ。」その瞬間、はっとした。彼女の言葉を聞いて、マネージャーと選手を兼任しているからこそできることがあるのではないかと思ったのだ。

私はマネージャーだから、選手を支える人たちの気持ちが分かる。親や先生方がどんなに熱心にサポートしてくださっても、プレーするのは選手自身だ。私はそのことのもどかしさや、選手にかけられている期待や応援の気持ちの大きさを知っている。だから、たとえどんな理由があっても、コートに立っている以上は、支えてくださっている方々へ感謝の気持ちを持ちながら全力でプレーすべきだと思うことができる。

私は選手だから、心の状態がどれ程プレーの質に影響するのかが分かる。試合や練習の時、どんな言葉をかけられると嬉しいかを知っている。だから私は、マネージャーとしてベンチにいるときも、試合の流れが悪い局面でこそ前向きな言葉をかけることを意識している。また、選手たちを見ていて良いプレーや改善点があったと感じたら、積極的に伝えるようにしている。

二つに分かれている道を一度に歩いていくことなんて、不可能だろうと思っている。しかし、気付いたのだ。私は目の前にある二つの道を同時に進んでいくような無茶をしようとしているのではなく、新しい三本目の道を切り開いていこうとしているのだ。確かに私が今歩んでいる道は、決してきれいに整えられた道ではない。どんな困難が待ち受けているかも分からない。悩んで、もがいて、たくさんの失敗を重ねながら前に進んでいくしかないのだ。自分の手で作り上げていった道の先にまだ誰も見たことのない景色が待っていると信じて、私は今日も駆け足で体育館へと向かう。